ホトトギス

九月号

ホトトギス
昭和二十四年三月二十六日運輸省特別扱承認雑誌第六二七号
平成三十年九月一日発行（第百二十一巻第九号）

風雅の小筥〔九〕

廣太郎

この稿を認めているのは、平成三十年五月十七日で、考えてみると、来年の五月はもう平成ではなくなっているのである。そんな事を考えると季節の移り変りの早さを感じてしまう。

五月といえば、季題の上では春から夏へと変わる節目になる。勿論他にも二月、八月、十一月も同じように季節の変り目で、特に虚子編『新歳時記』、汀子編『ホトトギス新歳時記』では月別で編纂されている関係で、旧暦の立春、立夏、立秋、立冬が新暦では少しずれる事になる。そのずれの問題は今回の話題ではなく、季節の変り目と季題の使い方について述べてみたいと思うが、私が現在毎日通勤している東京の丸の内というオフィス街では、特に今年気付いたのだが、五月一日の朝、大手会社のサラリーマンは一斉にノーネクタイになったように感じた。所謂クールビズである。それを見て、ある句会での質問を思い出した。「立夏が過ぎたら、春の季題で句を作ったらあかんのですか」という質問である。逆のケースではあるが、ある人が四月に蟻蠓を実際見てそれを句にした事があったが、それは絶対にいけないとは言えないであろう。勿論基本的には夏が来ると、確かに夏の心持ちになり、実感として夏を詠むのは当然だが、夏になったら、一斉に春の季題が消え失せる事はなく、反対に前述の蟻蠓も立夏を過ぎてから突然生息しだすという事はないのである。虚子が夏の北海道で冬の句を詠んだのは有名な話である。俳句は不自由な文学ではないのである。

PDF= 俳誌の salon

句日記　汀子

平成二十九年九月二日　芦屋ホトトギス会

初月の敦煌の旅忘れめや

秋の蚊に刺さるるために出でし庭

盆休終へし元気の揃ふ会

七草に加はらぬもの活け足しぬ

九月三日　下萌句会

二三日忽ち過ぎぬ葉月かな

咲きさうでまだ咲き初めぬ萩の花

一日を使ひ切つたる夜長かな

結局は夜長を使ひ果たしけり

過ぎてゆく時間と別にある夜長

九月四日　ロイヤル俳壇

気がつけば花野に過ぎてゐし時間

見送りに出て月仰ぐ二人かな

芋茹でて主婦に戻れね月日あり

祖父のこと曾祖父のこと月に問ふ

気心の知れし仲間と仰ぐ月

九月八日　工業倶楽部

虫を聞き見舞ふ心のととのひし

九月九日　日本伝統俳句協会全国俳句大会

新涼の風に忌日の旅心

九月十二日　大阪倶楽部

幾度も来たる花野の新しく

野の起伏抜けて白露の旅路かな

忌日又白露の旅にあることを

旅路あり湖畔尽きざる虫の原

迷路より迷路へ花野一部分

雨止んで月の満ちゆく日々となる

九月十二日　綿業倶楽部

蜻蛉と共に湖畔を引返す

爽やかな旅路終へたる家居かな

癒え給へ笑顔もてその爽やかな

雨止んで蜻蛉に空入れ替る

九月十四日　清交社

夕月の帰路となりたる空仰ぐ

秋草を束ねても野の風情あり

台風の行方気になる旅路あり

野にあれば目立たぬ秋の草束ね

夕月夜旅路遥けくありしこと

鉦叩忌日めぐりて来しことを

九月十六日　句会と講演の会

大会を共にせしこと爽やかに

誰も居ぬ子規の墓前に供ふ秋

秋草を活けて忌日の心かな

癒ゆる日をただ待つばかりなる雨月

九月十九日　有恒俳句会

秋草の旅路といはん風の中

寝室は野分の気配閉ざされし

九月十九日　無名会

爽やかといふほかはなき朝かな

今日のこと今日片付けて爽やかに

台風を避けて早めし空の旅

来るといふ台風に旅阻まれし

九月二十日　夏潮句会

取材受く時間やりくりして子規忌

まなうらに山湖の旅の芒原

台風のかけらが通り過ぎにけり

芒穂を解くも芒の君如何に

芒原ここで迷はず引返す

小説の内容忘れ烏頭

水音と別に風音芒原

九月二十四日　北信越ホトトギス俳句大会

改めて日本海の秋の晴

霧抜けて抜けて青空日本海

参加するための秋晴たまはりぬ

九月二十八日　きさらぎ会

旅心ありつつ月の夜々家居

芒穂を解き初め旅路彩れる

秋深き雨の空港発ちて来し

癒え給へ初月の満ち来たる夜々

九月二十八日　アネモネ句会

旅疲れいつか消えぬし鰯雲

コスモスの旅路にはまり込みしより

一面のコスモスに旅包まれし

日帰りの旅のつづきぬ鰯雲

祈りても足らざる祈り鰯雲

九月二十九日　時雨句会

時に無駄夜長にはまり込むことも

萩芒庭の一劃野に仕立て

たたみたるまま持ち帰る秋日傘

PDF= 俳誌の salon

廣太郎句帳

廣太郎

平成二十九年九月一日　夢二忌全国俳句大会

瑕瑾無き秋天を突く榛名富士
その中の青を要として花野
秋日傘閉ぢ野の色に紛れゆく

九月二日　芦屋ホトトギス会

初月を重ね三十八回忌
君偲ぶ時七草の揺れ止まず
秋の蚊にＡＢ型といふ馳走

九月三日　野分会芦屋例会

忌日とはやがて思ひ出白露かな
忌心を重ね重ねて白露かな
茶立虫築百年を淋しめず
苦しみも神の摂理として白露

九月三日　青嵐会芦屋例会

女郎花黄色い声を張り上げて
衣被つるりと剥けて里心
塩に凝り酒に拘り衣被
衣被君も一皮剥けて欲し

九月五日　カトリック新聞選者吟

くわつと背ナ割れて空蟬生れゆく

九月七日　蕉心会

花木槿雨に疲れてゐる角度
何か落ちさうな白露の空であり
秋水を育んでゐる空の色
摂津より上野繋ぐ旅九月
秋雨や芭蕉史跡に石一つ
プロ野球先の見えたる秋思かな
初紅葉とは蕉庵の一と本に
蕉庵の歴史を綴るつづれさせ
風に揺れ雨に戸惑ふ花芒

九月八日　六甲会

今日西へ明日は東へ鰯雲
子規の声灯下親しく聞きし館
館の萩とは子規偲ぶ色として
鰯雲子規百五十歳の空
鰯雲富嶽を押さへ込んでをり
早世の忌日を明日に鰯雲

九月九、十日　公益社団法人日本伝統俳句協会全国俳句大会

順三忌露けき月日重ねつつ
忌心は白露を過ぎてより深し
邯鄲の統べられてゆく野の静寂

九月十一日　朝日カルチャー若草句会

秋草や榛名の風を存分に
夢二現れさうな夜霧の記念館
その中の黄に秋蝶の集まり来
秋蝶やビルの高さに紛れざる
霧霽れて君の唇近付き来
秋蝶の空は天使の舞ふ高さ
湖風に色決めかねてゐる千草

九月十四日　土筆会

烏頭程好き距離に咲く山路
貝割菜一品足して鄙の宿
烏頭虚子山荘を戦かせ
一本の鉄路白露の旅繋ぐ
都心の田守る七体の案山子かな

九月十五日　北國文芸選者吟

大都会楚々と揺れたる千草かな

九月十六日　ホトトギス社句会

最終便雨月の雲を突き抜けて
一と本の向きに拘る子規忌供華
薑を添へて一品出来上る

九月十七日　青嵐会東京例会

目立たざる場所に目立ちて曼珠沙華
日曜の雨の音階昼の虫
日の本を嗤ひ颱風近付き来
忌心は子規句心は七草へ
蓑虫に無情の風と有情の日

九月十七日　野分会東京例会

茶立虫大本山の片隅に
開基千七百年や茶立虫
聖堂に快癒の祈り白露の日

九月十八日　日本伝統俳句協会関東支部茨城県部会

曼珠沙華沼への順路明かしゆく
沼といふ水澄む広さありにけり
ほんたうに河童出さうな沼の秋
列島の秋引つ張つてゆく嵐
ホ句の秋小川芋銭といふ縁

九月二十一日　登高会

秋声か河童の声か沼日和
神の声響く時蛇穴に入る
蛇穴に入る前イヴ誑かす
葛の花日を拒み風拒まざる
懺悔室足元よりの秋の声
猫の耳ぴくと聞き留む秋の声

九月二十三、二十四日　北信越ホトトギス俳句大会

越前の風に靡きて稲の秋
出来秋を鴉守るみに旋回す
コンバイン切り取つてゆく稲筵
七草を活けて大会華やげる
爽やかや柱状節理踏み締めて
秋潮や水惑星を塗り替へて
虚子の文字なぞれば聞ゆ秋の声

九月二十六日　若水句会

参道の幅を狭めて昼の虫
悌は永久に変らず秋彼岸
秋彼岸秘仏公開されてをり
秋彼岸太陽力抜き始め
古の謀叛を知るや桔梗咲く

九月二十七日　目黒学園句会

初雁に湖襟を正しゆく
逃したる鱸水底翻る
大琵琶の水面母とし雁来る
十六夜を待つ君を待つ心もて
湖中句碑淋しがらせず雁渡る
釣られゆく鱸銀鱗日を弾く
十六夜の月にいざよふ波頭

PDF= 俳誌の salon

雑詠

廣太郎　選

春眠の覚めることなく逝かれしと　東京　今井千鶴子
過ぎゆくは花のみならず人も亦　同
区役所に借りし菜園葱坊主　同
くれなゐは砕け散る色八重椿　渋川　木暮陶句郎
鳥帰る人は大地に捕はれて　同
春愁や風にささくれたる水面　同
己鼓舞する鶯を風が押す　大野城　阿比留初見
縺れつつ視界を逸れてゆきし蝶　同
春灯や人は未来をのみ言うて　同
みよし野の蝶となり来てゐし君か　長岡　安原　葉
花屑の朽ちし路傍も吉野山　同
花屑も朽ちてしづもる吉野山　同
春眠の覚めて手足の重さかな　神戸　山田佳乃
池一つ烟らせてゐる蝌蚪の群　同
入学児こんがらかつて歩みけり　同
み吉野の惜春の庭あるがまま　龍ケ崎　今橋眞理子
春宵の庭美しくさせて雨　同
惜春の宴映して雨の窓　同

桜貝海の言葉として拾ふ　袋井　湖東紀子
桜貝拾はせたるも旅心　同
灯を消して部屋の形の春の闇　同
虚子像にうすき胸あり法師蟬　東京　今井肖子
蜩の渡り廊下を僧一人　同
日差し来てかなかな止んでしまひけり　同
花下といふ静かな時間ありにけり　熊本　岩岡中正
隣より余慶のやうに散るさくら　同
走り出しさうな日月飛花落花　同
エープリルフール亀鳴いてはならぬ　神戸　後藤比奈夫
この花とならば逢瀬といふ言葉　同
花よりも散りゆくものにわが心　同
絢爛の伽藍を闇に薪能　東京　田丸千種
昂ぶれば闇退ける薪能　同
父祖よりの寺祖母よりの風炉継げる　同
長身を四つに折りて汐干狩　神戸　藤井啓子
夏めく日追ひかけ回し犬洗ふ　同
麦秋や毎朝しぼる山羊の乳　同
颯爽と川風羽織り五月場所　同　涌羅由美
航跡の白は薄暑を引き離し　同
老鶯や四次元さらに広げをり　同
海風は富士にぶつかり桃の花　熱海　嶋田一歩
海風に日差しの揺れてチューリップ　同
海風の素通りをして竹の秋　同

PDF= 俳誌の salon

雑詠句評（八月号より）

地に跪きては野火を放ちけり　熊本　**岩岡中正**

「跪きては」という措辞から、これは、ひとりの野焼勢子の姿を詠んだものだろう。その勢子は、火を点ける時は必ず地に膝をつけるという。それは単にていねいに点火するというだけでなく、今も活動する火の山阿蘇に対する、ややオーバーに言えば、敬虔な心持ちから出た態度ではなかろうか。作者もそんな思いで勢子の姿を見られていたのだろうと思える。虚子の言う、「眺め入る」を実践された一句かと思う。（公次）

人間と、その他の動物との違いは、火を操る、という事もその一つだと聞いた事がある。太古から人類は火を使い、それを不思議な力として崇めてきた歴史もあるだろう。野を焼くのにも自然を崇める気持があるのではないだろうか。跪くという仕草に何か祈りに似た神々しさを感じる。（廣太郎）

詳細の知れぬ訃音や涅槃浬繋西風　神戸　**千原叡子**

何某さんが亡くなられた、というのでなく、どうも何某さんが亡くなられたらしい、というような訃音に接することがある。そういう時は、たいてい昨日今日でなく、ずいぶん前に逝去しておられたのに、人々に知らされていなかった訃である。もしかすると、西方浄土からの風に乗って届くのかもしれない。

涅槃西風は冬の季節風の名残であるという。つまり寒いのだ。人の死だから涅槃に関わるというだけでなく、詳細の知れぬ訃報をお受けになった日の冷えびえとした心を伝える季題である。（霜衣）

作者は、関西で、ホトトギス同人や、その他俳句関係の団体の重鎮の方々の消息を結構把握される立場におられ、その事を詠んでいらつしゃるのかも知れないが、ある俳句関係の重鎮の方の訃音なのだろう。ところが詳細が判らずに他の方面へのお知らせもままならない。季題が効いている。（廣太郎）

PDF= 俳誌の salon

天地有情

六子選

君の亡き花追ふ旅とならうとは　神戸　千原叡子
幽明のあはひ吉野の朧かな　同
障子開くより花嫁の出来上る　東京　稲畑廣太郎
聖堂の婚に冷たさ消えゆけり　同
初音して百壱歳を励ましぬ　神戸　後藤比奈夫
人生の只今朧月夜かな　同
吉野山歩す春暁の君の影　長岡　安原葉
君偲ぶ吉野山路の遅日にも　同
百人が同じ弁当春の野に　相模原　木村享史
探さずも天に光りて初桜　同
この部屋のどこかに御魂春の宵　東京　山田閏子
蝶となり吉野の空に遊ばれよ　同
たちまちに花は幻人も亦　同　今井千鶴子
舟寄せて耀り落としたり桜鯛　同
清貧のホ句の生涯秋刀魚焼く　福山　竹下陶子
縞馬の目の泣きぼくろ小六月　同
母の日の母を泣かせてしまひたる　神戸　和田華凛
葉桜に夕葉桜といふ風情　同

朝顔や祖母の好みし団十郎　東京　今井肖子
銀色の露近づけば透明に　同
刻一刻蝕まれゆく冬満月　吹田　大橋晄
低木に隠れしままの初音かな　同
山荘を開けて五月の風満たす　神戸　三村純也
献上の誉れの味の穴子鮨　同
一人にて詩画を愉しむ日永かな　同　浜崎素粒子
閑人の一書世に出て亀鳴ける　同
吉野山しつとり濡れて花は葉に　芦屋　黒川悦子
み吉野に会うて別れて春の行く　同
咲き急ぐ一気に牡丹桜まで　宇佐　熊埜御堂義昭
伝統は磨き繋いでけふ虚子忌　同
指先に闘志ありけり甘茶仏　熊本　岩岡中正
竜のごとくに玉解いてゆく芭蕉　同
はたと会ふ残花に心通はせて　龍ケ崎　今橋眞理子
また一人星になりたる暮の春　同
花は散り消えざる思ひ深く抱き　宝塚　水田むつみ
牡丹の残像のみを置きし庭　同

PDF= 俳誌の salon